



本音の在りか

鈴木 紀 (すずき もとい)

本館先端人類科学研究部

集まってきた女性たち

二〇〇六年八月二日、メキシコはチアパス州のある農村を初めて訪問した。日本の国際協力機構が実施した農村開発プロジェクト(PAPROSOC)を、現地の女性たちがどのように受け止めているか聞き取り調査するため。リーダーのグアダルルーペさんを訪ねると、プロジェクトに参加した女性たちが村の公民館に集まってくるという。それはありがたいが、手回しが良すぎる。わたしは個別インタビューを望んでいたのだ。まずリーダーと世間話から始めて、少しずつプロジェクトの話聞き、他の仲間を紹介してもらって、そこで

もおしゃべり：と、段取りを踏んで聞き取りを進めるはずだった。かといって集まった人びとを解散させるわけにもいかず、わたしはほどなく一八人の主婦の前で、冷や汗をかきながら自己紹介を始めた。アドリブで芸を披露することになった漫才師の気分でもいったらよいだろうか。何故こんなことになってしまったのか。事前に国際協力機構に便宜供与をお願いし、この村への訪問を伝えていた。それに対し「万事アレンジしておきますよ」というメールをもらっていた。おそらくプロジェクトのスタッフがグアダルルーペさん自身が「日本人が調査に来るから皆を集めよう」と発想したのだろう。

開発援助のツール

じつはこうした集会は開発援助活動ではめずらしいことではない。途上国の農村開発を始めるには、農民の暮らしているところをよく調べるのが大切だ。そのため、皆に集まってもらって一度に尋ねる方が効果的と考えられている。また重要な情報を聞き出すときに、村長など一部の村人から意見を聞くよりも、なるべく多くの村人と相談した方が、あとあと皆が協力的になると期待されている。

わたしがかわかることになったこの日の集会は、援助の専門用語でフォーカス・グループ・ディスカッションという。村人のなかからプロジェクトに参加した経験をもつ者に集まってもらい、その人たちのあいだで共通に理解されている考えを探索するツールだ。終了した援助プロジェクトを受益者の視点で評価するときによく用いられる。研究者というよりもプロジェクト関係者としてわたしを認識した村人にとって、この集会の開催はきわめて自然な流れだったのだろう。

人びとの本音

村の女性たちはこの種の集会に慣れてきた。出身地、学歴、子どもの数など客観的

な情報については、はきはきと答えてくれた。しかも他の人の前なので、嘘をつくこともない。なるほど個別訪問よりは時間を節約できるとわたしも納得した。しかしひとつ主観的な問題はどうかだろうか。わたしはプロジェクトの印象を聞いてみた。

「お金をもらってもすくなくなくなるが、プロジェクトで学んだ技術は残る」という意見。グループで野菜づくりを学んだ女性の模範解答だ。このプロジェクトの公式の評価報告書にも同様の意見が書かれていた。それを確認できたことはわたしにとって収穫だが、もつと違う意見もあるはずだ。そこでグループ活動の難しさについて尋ねてみた。

「皆の合意をとりつけること」と一人の女性。それではそれをどう解決しましたか」とつっこむわたし。しばしの沈黙。顔を見あわせる女性たち。やがて別の一人が「皆で動く仕事は早くすむ」というもうひとつの模範解答。その発言でわたしの質問はそらされてしまった。

フォーカス・グループ・ディスカッションを試みる筆者



農村開発プロジェクトがおこなわれたメキシコの農村



プロジェクトで学んだ野菜づくり (提供=PAPROSOC)

プロジェクトのワークショップ (提供=PAPROSOC)



ワークショップの成果を発表する女性たち (提供=PAPROSOC)



だと気付いた。しかし同時にグアダルルーペさんが集会でも個人面接でもこのことをわたしに話してくれなかったことが気になった。

この事例から、集会の模範解答を建て前、技師への相談を本音とみなすことはたやすい。そう考えると建て前しか聞けないフォーカス・グループ・ディスカッションは調査方法としては信頼がおけず、それに依拠するプロジェクト評価にも疑問がわいてくる。しかしわたしは両方とも彼女たちの本音なのだと思う。この日の集会は、問題を訴えて解決策をえる場というよりも、援助供与国の日本からはるばるやってきたわたしをもてなす場だったのだ。村の女性たちは、自分たちがどれだけががんばったかを伝えることによりわたしを安心させ、あわよくばさらなる援助を引き出したいと願ったのだらう。だからフォーカス・グループ・ディスカッションは決して無駄ではない。援助の受益者たちが、援助の提供者に本音を伝える有効な手段なのだから。

ただしフォーカス・グループ・ディスカッションを受益者の本音を聞く唯一の手段とみなすことは間違いだ。人びとは他の方法でも本音をいう。そういう本音を聞き洩らさないためには、効率は悪くともたくさん時間をフィールドですこすこすることが不可欠だ。文化人類学者が開発を研究することの意義はこのあたりにあるのだろう。